

百人一首

平成一三年二月一五日

- 一 あきのたの かりほのいほの とまをあらみ わがころもでは つゆにぬれつつ 天智天皇
- 二 はるすぎて なつきにけらし しろたへの ころもほすてふ あまのかぐやま 持統天皇
- 三 あしびきの やまどりのをの しだりをの ながながしよを ひとりかもねむ 人丸
- 四 たごのうらに うちいでてみれば しろたへの ふじのたかねに ゆきはふりつつ 赤人
- 五 おくやまに もみぢふみわけ なくしかの こゑきくときぞ あきはかなしき 猿丸大夫
- 六 かささぎの わたせるはしに おくしもの しろきをみれば よぞふけにける 中納言家持
- 七 あまのはら ふりさけみれば かがなる みかさのやまに いでしつきかも 阿倍仲麿
- 八 わがいほは みやこのたつみ しかぞすむ よをうちやまと ひとつはいふなり 喜撰
- 九 はなのいろは うつりにけりな いたづらに わがみよにふる ながめせしまに 小町
- 一〇 これやこの ゆくもかへるもわかれては しるもしらぬも あふさかのせき 蝉丸
- 一一 わたのはら やそしまかけて こぎいでぬと ひとつにはつげよ あまのつりぶね 篁
- 一二 あまつかぜ くものかよひぢ ふきとぢよ をとめのすがた しばしとどめむ 遍昭
- 一三 つくばねの みねよりおつる みなのかは こひぞつもりて ふちとなりぬる 陽成院
- 一四 みちのくの しのぶもぢずり たれゆゑに みだれそめにし われならなくに 河原左大臣
- 一五 きみがため はるののにいでて わかなつむ わかころもでに ゆきはふりつつ 光孝天皇
- 一六 たちわかれ いなばのやまの みねにおふる まつとしきがば いまかへりこむ 行平
- 一七 ちはやぶる かみよもきかず たつたがは からくれなゐに みづくくるとは 在原業平朝臣

- 一八 すみのえの きしによるなみ よるさへや ゆめのかよひぢ ひとめよくらむ 敏行
- 一九 なにはがた みじかきあしの ふしのまも あはこのよを すぐしてよとや 伊勢
- 二〇 わびぬれば いまはたおなじ なにはなる みをつくしても あはむとぞおもふ 元良
- 二一 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まちいでつるかな 素性法師
- 二二 ふくからに あきのくさきの しをるれば むべやまかぜを あらしといふらむ 文屋康秀
- 二三 つきみれば ちぢにもこそ かなしけれ わがみひとつの あきにはあらねど 大江千里
- 二四 このたびは ぬさもとりあへず たむけやま もみぢのにしき かみのまにまに 管家
- 二五 なにしをばば あふさかやまの さねかづら ひとにしられて くるよしもがな 三条右大臣
- 二六 をぐらやま みねのもみぢば ころあらば いまひとたびの みゆきまたなむ 貞信公
- 二七 みかのほら わきてながるる いづみかは いつみきとてか こひしかるらむ 兼輔
- 二八 やまざとは ふゆぞさびしき まさりける ひとめもくさも かれぬとおもへば 源宗子
- 二九 こころあてに をらばやをらむ はつしもの おきまどはせる しらぎくのはな 躬恒
- 三〇 ありあけの つれなくみえし わかれより あかつきばかり うきものはなし 忠岑
- 三一 あさばらけ ありあけのつきと みるまでに よしののさとに ふれるしらゆき 坂上是則
- 三二 やまがはに かぜのかけたる しがらみは ながれもあへぬ もみぢなりけり 春道列樹
- 三三 ひさかたの ひかりのどけき はるのひに しつこころなく はなのちるらむ 紀友則
- 三四 たれをかも しるひとにせむ たかさこの まつもむかしの ともならなくに 藤原興風
- 三五 ひとはいさ こころもしらず ふるさとを はなぞむかしの かににほひける 紀貫之
- 三六 なつのよは まだよひながら あけぬるを くものいつこに つきやどるらむ 清原深養父
- 三七 しらつゆに かぜのふきしくあきのは つらぬきとめぬ たまぞちりける 文屋朝康
- 三八 わすらるる みをばおもはず ちかひてし ひとのいのちの をしくもあるかな 右近
- 三九 あさぢぶの をのしのはら しのぶれど あまりてなどか ひとのこひしき 参議等
- 四〇 しのぶれど いろにいでにけり わがこひは ものやおもふと ひとのとぶまで 平兼盛
- 四一 こひすてふ わがなはまだき たちにけり ひとしれずこそ おもひそめしか 壬生忠見
- 四二 ちぎりきな かたみにそでを しぼりつつ すゑのまつやま なみこさじとは 清原元輔
- 四三 あひみでの のちのこころに くらぶれば むかしはものを おもはざりけり 権中納言敦忠

四四	あふことの	たえてしなくは	なかなか	ひとをもみをも	うらみざらまし	中納言朝忠
四五	あはれとも	いふべきひとは	おもほえで	みのいたづらに	なりぬべきかな	謙徳公
四六	ゆらのとを	わたるふなびと	かぢをたえ	ゆくへもしらぬ	こひのみちかな	曾根好忠
四七	やへむぐら	しげれるやどの	さびしきに	ひとこそみえね	あきはきにけり	恵慶
四八	かぜをいたみ	いはうつなみの	おのれのみ	くだけてものを	おもふころかな	源重之
四九	みかきもり	糸じのたくひの	よるはもえ	ひるはきえつつ	ものをこそおもへ	大中臣能宣
五〇	きみがため	をしからざりし	いのちさへ	ながくもかなと	おもひけるかな	藤原義孝
五一	かくとだに	えやはいぶぎの	さしもぐさ	さしもしらじな	もゆるおもひを	実方
五二	あけぬれば	くるるものとは	しりながら	なほうらめしき	あさぼらけかな	道信
五三	なげきつつ	ひとりぬるよの	あくるまは	いかにひさしき	ものとかはしる	右大将道綱の母
五四	わすれじの	ゆくすゑまでは	かたければ	けふをかざりの	いのちともがな	儀同三司の母
五五	たきのおとは	たえてひさしくなりぬれど	なこそながれて	なほきこえけれ		大納言公任
五六	あらざらむ	このよのほかの	おもひでに	いまひとたびの	あふこともがな	和泉式部
五七	めぐりあひて	みしやそれとも	わかぬまに	くもがくれにし	よはのつきかな	紫式部
五八	ありまやま	あななさきはら	かぜふけば	いでそよひとを	わすれやはする	大式三位
五九	やすらはで	ねなましものを	さよふけて	かたぶくまでの	つきをみしかな	赤染衛門
六〇	おほえやま	いくののみちの	とほければ	まだふみもみず	あまのはしだて	小式部内侍
六一	いにしへの	ならのみやこの	やへざくら	けふこのへに	にほひぬるかな	伊勢大輔
六二	よをこめて	とりのそらねは	はかるとも	よにあふさかの	せきはゆるさじ	清少納言
六三	いまはただ	おもひたえなむ	とばかりを	ひとつてならで	いふよしもがな	左京大夫道雅
六四	あさばらけ	うづのかはざり	たえだえに	あらはれわたる	せぜのあじるぎ	権中納言定頼
六五	うらみわび	ほさぬそでだに	あるものを	こひにくちなむ	なこそをしけれ	相模
六六	もろとも	あはれとをもへ	やまざくら	はなよりほかに	しるひともなし	前大僧正行尊
六七	はるのよの	ゆめばかりなる	たまくらに	かひなくたたむ	なこそをしけれ	周防内侍
六八	こころにもあらで	つきよに	ながらへば	こひしかるべき	よはのつきかな	三条院
六九	あらしふく	みむるのやまの	もみぢは	たつたのかはの	にしきなりけり	能因法師

七〇 さびしさに やどをたちいでて ながむれば いづこもおなじ あきのゆふぐれ 良暹法師
七一 ゆふされば かだのいなば おとづれて あしのまろやに あきかぜぞふく 大納言経信
七二 おとにきく たかしのはまの あだなみは かけじやそでの ぬれもこそすれ 祐子内親王家紀伊
七三 たかさこの をのへのさくら さきにけり とやまのかすみ たたずもあらなむ 前権中納言匡房
七四 うかりける ひとをはつせの やまおろしよ はげしかれとは いのらぬものを 源俊頼朝臣
七五 ちぎりおきし させもがつゆを いのちにて あはれことしの あきもいぬめり 藤原基俊
七六 わたのはら こぎいでてみれば ひさかたの くもぬにまがふ おきつしらなみ 法性寺入道前関白太政大臣
七七 せをはやみ いはにせかるる たきかはの われてもすゑに あはむとぞおもふ 崇徳院
七八 あはぢしま かよふちどりの なくこゑに いくよねざめぬ すまのせきもり 源兼昌
七九 あきかぜに たなびくもの たえまより もれいづるつきの かげのさやけさ 左京大夫顕輔
八〇 ながからむ こころもしらず くるかみの みだれてけさは ものをこそおもへ 待賢門院堀河
八一 ほととぎす なきつるかたを ながむれば ただありあけの つきぞのこれる 後徳大寺左大臣
八二 おもひわび さてもいのちは あるものを うきにたへぬは なみだなりけり 道因法師
八三 よのなかよ みちこそなけれ おもひいる やまのおくにも しかぞなくなる 皇太后宮大夫俊成
八四 ながらへば またこのごろや しのばれむ うしとみしよぞ いまはこひしき 藤原清輔朝臣
八五 よもすがら ものおもふころは あげやらで ねやのひまさへ つれなかりけり 俊恵法師
八六 なげけとて つきやはものを おもはする かこちがほなる わがなみだかな 西行法師
八七 むらさめの つゆもまだひぬ まきのはに きりたちのぼる あきのゆふぐれ 寂蓮法師
八八 なにはえの あしのかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや こひわたるべき 皇嘉門院別当
八九 たまのをよ たえなばたえね ながらへば しのぶることの よわりもぞする 式子内親王
九〇 みせばやな をじまのあまの そでだにも ぬれにぞぬれし いろはかはらず 殷富門院大輔
九一 きりぎりす なくやしもよの さむしろに ころもかたしき ひとりかもねむ 後京極攝政太政大臣
九二 わがそでは しほひにみえぬ おきのいしの ひとこそしらね かわくまもなし 二条院讃岐
九三 よのなかは つねにもがもな なぎさこぐ あまのをぶねの つなでかなしも 鎌倉右大臣
九四 みよしのの やまのあきかぜ さよふけて ふるさとさむく ころもつつなり 参議雅経
九五 おほけなく つきよのたみに おほふかな わがたつそまに すみぞめのそで 前大僧正慈円

九六	はなさそふ	あらしのにはの	ゆきならで	ふりゆくものは	わがみなりけり	入道前太政大臣
九七	こぬひとを	まつほのうらの	ゆふなきに	やくやもしほの	みもこがれつつ	権中納言定家
九八	かぜそよく	ならのをがはの	ゆふぐれは	みそぎぞなつの	しるしなりける	従二位家隆
九九	ひとをもをし	ひとつもつらめし	あぢきなく	よをおもふゆゑに	ものおもふみは	後鳥羽院
一〇〇	ももしきや	ふるきのきはの	しのぶにも	なほあまりある	むかしなりけり	順徳院